

「ツナガリ」が繋がっていく

僕の町には小さなアーケードがある。

足を踏み入ると、おばあちゃんが魚屋の店主と今晚の献立について楽しく話してたり、新しいパン屋ができたなんて噂が立ってたりそんな地元の魅力的な「ツナガリ」なんてものをアーケードは肌で感じ取られる。

商店街にある豊かな「人のツナガリ」とはどうして生まれているんだろう。

アーケード内の一つ一つの人のコミュニケーションが全体の魅力になっている。衰退しつつあるアーケードのこんな価値を建築していきたい。



01 提案

衰退気味のアーケード商店街の豊かなつながり「**＋－×÷**」を切り口として定義する。

そんな豊かなつながりをもとに空き家化してしまった土地を地域センターとして計画していく。アーケード商店街の昔ながらの豊かな「ツナガリ」を紡ぎ大きくする。

02 商店街のつながり

＋(タス)：新しい発見



新しいお店、グッズ、食べ物、人などを新発見して興味を持つ。

－(ヒク)：引き込む動線(道)



街の動線の一部で街とのつながりをもつ

×(カケル)：接点、情報交換



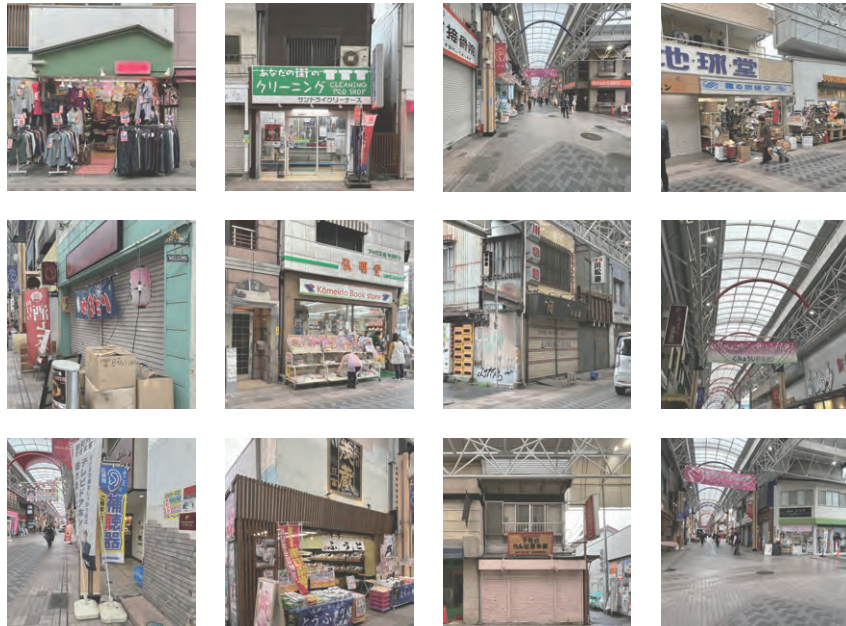
商店街の新情報を店主から聞いたり、興味のなかった分野のお店の存在に気が付いたりする。

÷(ワル)：空間を皆でシェア



しゃべることはないけど、みんないて活気がある。どこか安んじたりする。

03 調査



04 ダイアグラム

商店街のにぎわいを紡げる形とは、「 $+$ 」 $\times$ 「 $\div$ 」で解釈した商店街の「ツナガリ」を設計に落とし込んだ。



商店街の舗装、タイルの色や配置の仕方によってお店との道路の関係が曖昧になっている。



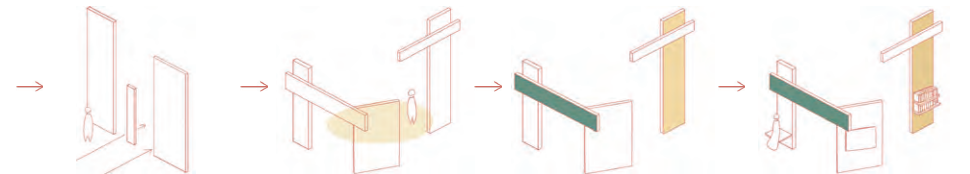
様々な色が使われた看板、この看板の連なりの中になじむように看板スケールの板によって構成する



道と建物の中間領域を作る。商店街との「 $\times$ ：接点、情報交換」を増やす。

中間領域を波線にすることで、さらに道「 $-$ ：町の動線」と建物の関係性を曖昧にして「 $\times$ ：接点」をつくる。

さらにスラブの波も重ね、アーケード全体を見ると店、道、新しい地域センター部が緩やかにつながる。「 $\div$ ：空間をシェア」



立てられた板を用いることによって、壁では作れない隙間を作り空間の境目を曖昧にする「 $\div$ ：空間のシェア」

壁をまばらに配置した。囲まれた空間は緩くプライベートを守る。「 $\div$ ：空間をシェア」

商店の看板などの色を板に塗装する。商店街の賑わいを残していく。「 $+$ ：情報の交換」

板に本棚、アトリエ、椅子などの機能をつけていく。「 $+$ （タス）：新しい発見」

05 柔軟に変化する未来

この商店街はどんな未来をたどるのか。

シンプルな板の重なりによって柔軟に商店街の再生を促す。

それだけでは留まらず、どこか懐かしく安心する地域住民の居場所となりつつ、この場は地域の魅力として求心力をもつ。



板の重なりと店舗が柔軟な関係性を持って交わっている地域の居場所ができる



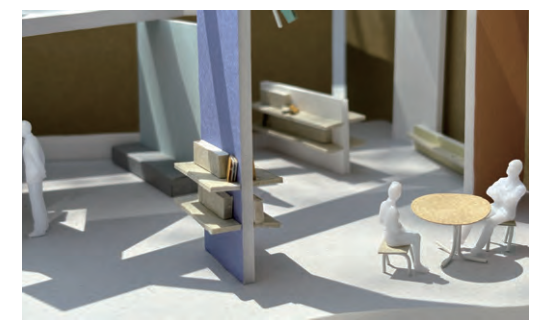
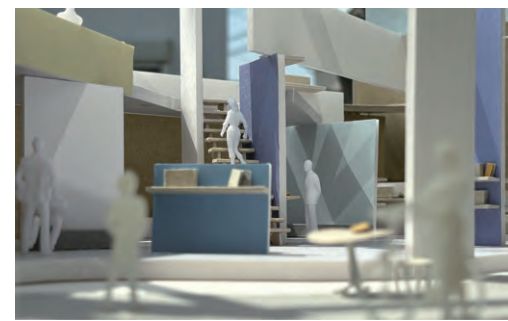
店舗が立ち退き空地、空き家化する。

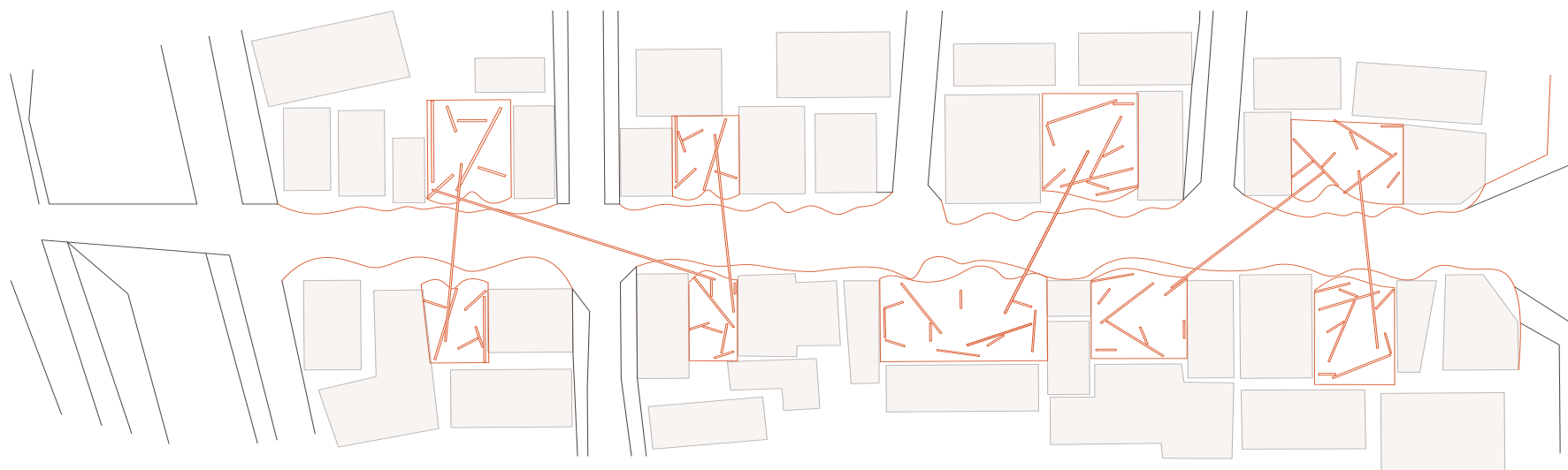
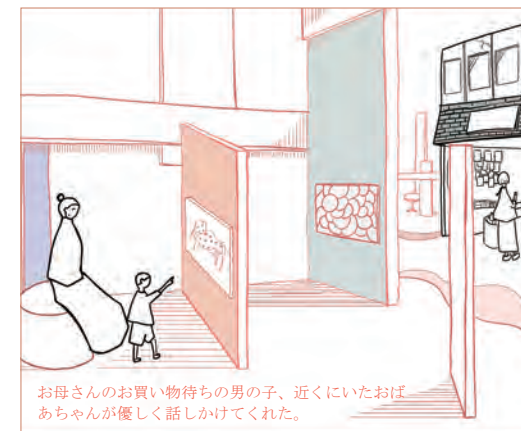
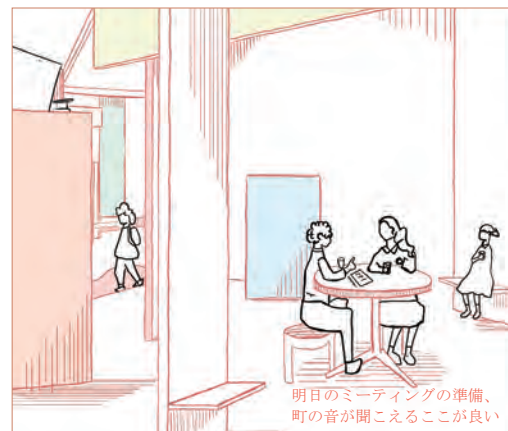
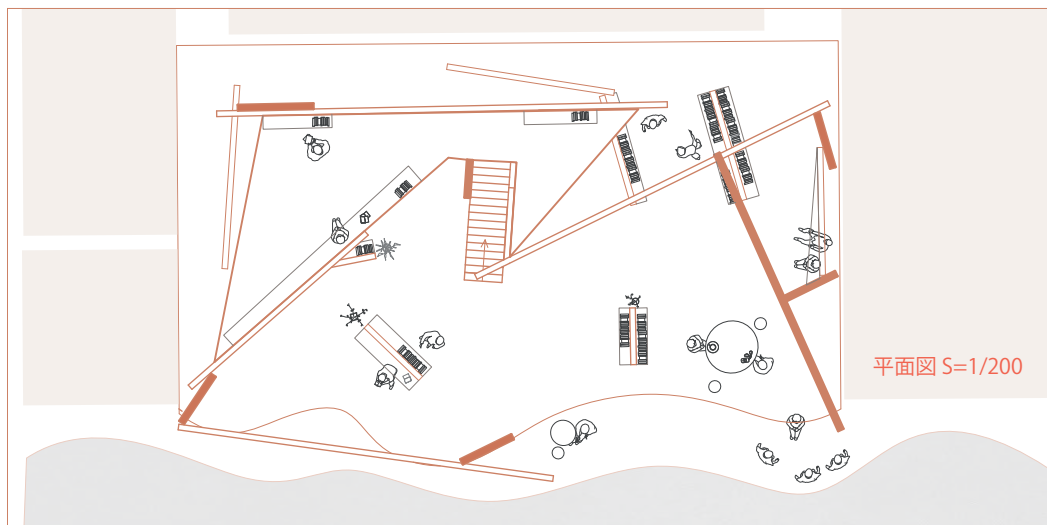
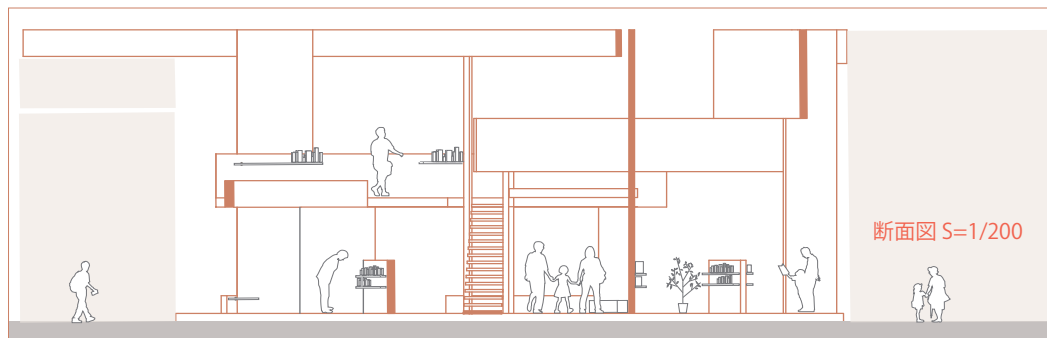


板の重なり（設計部）に挟まれた空き地、板の重なりによって連帯が強まったアーケードでは空き地でさえ活動の場として活きる



賑わいの持った空き地は場としての価値を持つ。そんな場に魅せられた人が新たに商売を始める。





配置図 S=1/700